

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	国民的取組のための基盤づくり
手法名	「流域交流」による環境教育と水源地の保全
主体	奈良県川上村「森と水の源流館」
背景(地域の課題)	水源地を有する上流部の里地里山保全は、対象となる山間地域に恩恵をもたらすだけではなく、下流の地域にとっても飲料水、灌漑用水等の直接的な利水だけでなく、癒しや健康など文化的な面でも大きな意義を持っている。一方で、里地里山の水源地保全は山間地域の住民だけでは維持することが困難な現状となっている。恩恵を受ける下流部の住民や企業など多様な主体による保全活動への関わりが求められている。
手法／方策の詳細	<p>1) 町による原生林の購入と調査 川上村で水源地の原生林740haを購入し保全。動植物の実態調査を行っている。一部は下流に位置する和歌山市民の森づくりとしても位置付けられている。</p> <p>2) 体験学習の実施 水源地の森ツアーを企画し、子どもたちが源流の体験に参加している。散策、筏(いかだ)流し、昔ながらの魚取りなど、原体験を提供。遠方などの理由により直接来ることが難しい子どもたちに対しては、教材の提供や出張教室を行っている。 そのほか、薪割りやかまどで炊くなどの里地里山の暮らしの体験なども企画し提供している。こうしたことを通じて、自分たちが環境に何ができるかを、体験を通じて伝えている。</p> <p>3) 保全活動の実施-「芽吹きのかげプロジェクト」- 源流域の斜面崩壊を防ぐため、間伐材を利用して土留めをし、傾斜地でも自然に根付く木を育てる取り組みを、地域のみならず地域外の企業とも連携して始めている(写真)。</p> <p>4) 流域交流と情報発信(図) 「流域交流」というキーワードのもとで、下流域に位置する都市部も視野に入れた交流や情報発信を心がけている。教材・出張教室はもとより、企業CSR活動の受け入れに向けた情報発信等を行っている。小学校3・4年生の社会科教科書でも紹介されている。</p>
手法・技術的視点	水源地を有する里地里山保全は、上流域の山間地域だけでは困難であり、水源の恩恵を受ける下流域の都市部などとの連携協働が重要である。教育や研修、実体験などのプログラムは保全活動の持続性と効率性を上げる試みとして着目される。

流域内における川上村は水源地や流域保全における重要な役割を担っていると言える。
こうしたつながりを再認識しながら、学習活動や保全活動における協働連携、ツアーなどを通じた地域活性化などを軸にした流域交流を試みている。

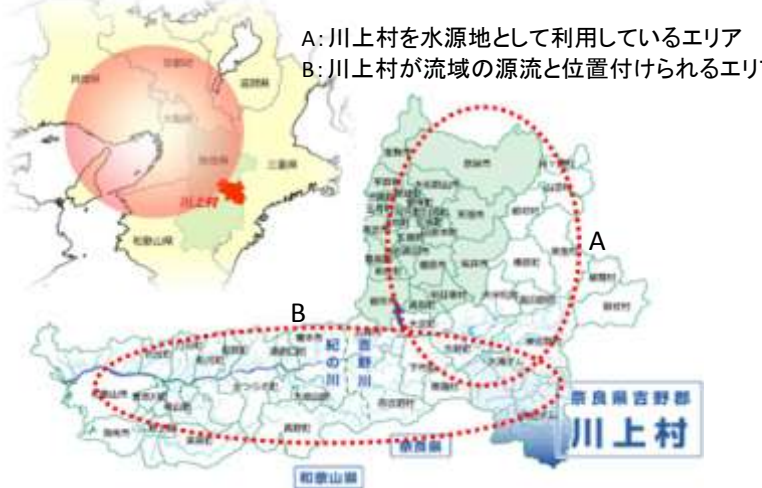


写真 間伐材を用いた土留め (土留め上に稚樹が出始めている)

図 川上村の流域交流イメージ

参考資料	里なび研修会in奈良 奈良県川上村 森と水の源流館事務局次長 尾上忠大
------	-------------------------------------